



「リハビリテーション処方学」

東京都養育院付属病院リハビリテーション部長 萩 島 秀 男 著

リハビリテーションがわが国の風土のなかに定着して日は浅い。リハビリテーションという名のつくセンター、病院はあちこちに建てられて充実してきているようだが、実際はどうか。リハビリテーションを推進してゆくものはセンターという名のつくものではなくそこに働くリハビリテーション職員である。そこにはまず処方をきちんと書ける医師がおり、そして理学療法、作業療法を処方どおり遂行できる PT・OT がいることが最低限必要である。

本書はリハビリテーションを処方する医師を対象として最低これだけは知っておかないと処方が書けないもののうち、理学療法に重点をおいて書かれたものである。そういう意味ですぐれた啓蒙的な役割を果たす書である。本論は大きく分けて3部よりなり、総論においてリハビリテーション職員によって構成される PT, OT, ST, 心理, MSW の各部門の概略的な説明がなされている。ついで各論 A において理学療法のうち主として物理療法について述べ、各論 B では疾患別による処方が述べられている。

理学療法の主体をなすものは運動療法であり、物理療法はあくまでも補助手段的なものである。このことは PT の立場からいくら強調してもしすぎることはないと思っている。リハビリテーションを可能ならしむるのは障害者の意志と結びついた身体の機能的な運動である。運動療法についての記述

は総論でなされており、基礎的な分類は記述とおりであるが、実際にはもっといろいろなテクニックや方法を用いているのが現状である。リハビリテーションを処方する医師としても知っていなければならないことだと思われ、PT の立場からは是非とも注文しておきたいことである。各論 B の疾患による処方においてその疾患における必要な運動療法の具体例が述べてあるから、実際にはこの各論の各章を読むことによって、实际的、具体的な運動療法の意義なり処方を知ることができる。

リハビリテーション医学における処方も投薬の処方と同じように明記することは当然であるが、実際の臨床の間では非常にルーズなようである。特に物理療法においてはひどいといっても過言ではないと思っている。物療内科出身以外の医師に要求することは無理かも知れないがリハビリテーションを処方する立場にある医師は当然知っているべきことだと思う。

そういう意味で本書の各論 A の物理療法の各 modality については実際に経験ある立場から書かれておりまた臨床的な説明も入れているから PT にとっても参考となり非常に有益である。やはり専門医として正式な教育を受けて米国リハビリテーション専門医アカデミー正会員の資格をもっている著者ならではのものである。

あちこちで日常的に臨床の間で見られることであるが患者が自分でマイクロウェーブをかけたり、

ひどいところでは牽引までやっているようなところがある。牽引についての大事な脊椎の頸椎、腰椎についての解剖、生理、運動等の知識をどれだけでも持っているか疑わしい医師、PT がいる、著者はそういう基礎的なことについても要領よく实际的にまとめており牽引についても新しく学ぶ点がある。

寒冷療法について3つの modality があげてあるが、わが国ではこの療法についてはまだあまり行なわれていないのではなかろうか。紹介的な意味も含めて PT ももっとこの療法にとり組んでみたらどうかと思う。

脳卒中、脳性まひの各項に Brunnstron や Bobath の名が全然見あたらないのが PT にとってちょっと淋しい気がする。

本書の付録は特色があり、いくつかの処方せん例があげてあり、また評価表も豊富に紹介してある。実際に処方例が書き入れてあり、また実際のケースで記録された評価表があげてあればもっと親切な紹介になったかも知れない。一般的に記録、報告のしかたについてアメリカと比較してかなりの差があると見るのは筆者だけのひがめだろうか。最後の文献は著者ならではと思うが Journal of american physical therapy association の発行所はワシントンに移っていることを付け加えて筆をおく。(A5判, 244 ページ, 2500 円, 医歯薬出版)

(リハビリテーション学院

理学療法学部長 松村 秩)